近代教科書の内容分析—
生命尊重と達成動機を中心に

その1　国語について

橋口英俊*　三角　同*　鮎川成子*　今井啓子*　浦部陽子*

The Content Analysis of Human-Esteem and Achievement Motive in the Modern Textbook （Ⅰ）The Language

Hidetoshi Hashiguchi, Hitoshi Misumi, Shigeko Ayukawa,
Keiko Imai, Youko Urabe

〔内容抄録〕本研究は教科書の人格形成におよぼす影響をできるだけ実証的に明らかにすることを目的とする。ここではその一環として国定Ⅰ期からⅥ期までの全小学校国語教科書を対象に内容分析した結果について報告する。方法；各教科を課ごとに生命尊重（L＋），非生命尊重（L－），達成動機（A）という観点から各3段階に評定し，それに内容別9領域，ジャンル別8領域を加えそれぞれ各期別学年別に比較検討する。結果；L－はⅤ期を頂点としてほぼⅠ期から上昇し，戦後のⅥ期で0に近く急降下する。但し大正デモクラシーのⅢ期には例外的に下降する。L＋はほぼその逆でⅥ期Ⅰ期の順に高く他はいずれも極端に低いのが特徴的である。AはⅠ期からⅢ期まで上昇し，以後高原状態となるがⅥ期ではかなり下る。いずれも時代社会を如実に反映した結果といえる。内容別では全体を通して自然が高いが国家主義や軍国主義はL－とほぼ平行関係にあるのが特徴的である。学年別では各期を通じほぼ3～5年に時代社会の価値観が最も反映しているように思われる。

Ⅰ　問　　題

本研究の究極の目的は，主として学校教育の人格形成における意義をできるだけ実証的に明らかにし，教育基本法にいう「個人の尊厳を重んじ真理と平和を希求する人間」の育成はいかにあるべきかを具体的に提示することにある。ここではその一環として，まず明治5年の学制発布以降の初等教育における教科書を各教科ごとに，主として生命尊重人間尊重という観点から内容分析し，実際にそれが現実の人間の生き方や価値観，人間形成にいかなる影響を及ぼしたかをできるだけ実証的に明らかにすることをさしあたっての目標とする。唐沢は「教科書が日本人を作った」[1]というが，特に初等学校教育における教科書の意義はそれが人格の基礎形成期であるだけに大きく，その内容が将来の個人の基本的行動様式を形作る上でかなりの影響をもつであろうことも想像に難くない。その点わが国では，明治初頭の学制発布後欧米の近代文化を内容とした翻訳教科書から伝統的な「孝」を中心とする儒教主義復活の教科書へ，更に国

＊児童学科

家統制の強化された「忠君愛国」を基調とする検定教科書から明治37年には早くもその後の日本を長期に亘り支配する国定教科書期に入る。しかも義務教育就学率が当初男子40%女子10%台であったのが，国定期に入る頃には共に90%を超える程の高普及率を示している[2]。これらをあわせ考える時，教科書の日本人の人格形成に与える影響は殊の外大きいように思われる。それは過去から現代の世相問題とも決して切り離せないであろうし，また将来の日本や世界を考える上でも貴重な資料を提供してくれるにちがいない。ところで，学校教育における教科書のもつ意義についてはこれまでも種々論じられており，その内容に関してもいろいろな立場からの分析が行なわれている。しかしながら，生命尊重人間尊重という観点に一貫してたった論文はあまりみられない。従来教育学はともすると方法論に弱点をもちやすく，心理学は逆に方法論に堕すきらいがあったが，本研究では，生命尊重人間尊重という観点から人間教育のあり方を実証的心理学的に問い直そうとするものである。教育の原点はそこにあり，教育基本法にいう目的も，つまるところそこにあると考えるからである。また，教科書の意図するところを実現する過程との関連で McClelland, D. C. らの研究を参考に達成動機も分析の視点に加えた。なお今回は，教科書が全国的な規模で影響をもちはじめたと考えられる国定Ⅰ期以降の教科書を主たる対象としてその内容分析した結果について報告する。また歴史的にも今日的にも特に心理的な面での影響が大きいと思われる国語をまずとりあげ，次いで国の意志と直結していると思われる修身や歴史・音楽その他の教科についても順次とりあげていく予定である。

Ⅱ 方　法

1　唐沢[3]や海後[4]らを参考に明治5年の学制発布以降第二次世界大戦後の文部省著作教科書までを次の9期に分ける。

(1)翻訳教科書時代（明治5～12年）
(2)儒教主義復活の教科書時代（明治13～18年）
(3)検定教科書時代（明治19～36年）
(4)国定Ⅰ期教科書時代（明治37～42年）
(5)国定Ⅱ期教科書時代（明治43年～大正6年）
(6)国定Ⅲ期教科書時代（大正7年～昭和7年）
(7)国定Ⅳ期教科書時代（昭和8～15年）
(8)国定Ⅴ期教科書時代（昭和16～20年）
(9)国定Ⅵ期教科書時代（昭和21～26年）

2　分析に用いたのは「日本教科書大系（近代編）」（全27巻，講談社発行，1964）である。これには明治初年からの小学校教科書の中で広く使用され，その時代の教材を代表すると認められるものの原典が復刻されている。また明治37年以降の国定教科書はすべて収録されている。このうち今回の報告に使用したのは，国語（4～9巻）である。

3　国定Ⅰ期以前の翻訳教科書や儒教主義復活の教科書，検定教科書については，日本教科書大系に収録されているものの概要を検討するにとどめる。

4　国定Ⅰ期以降の教科書については，次の方法により検討する。

＜国語＞

国定Ⅰ期からⅥ期までのすべての小学校教科書（但し国定Ⅰ期からⅣ期までは尋常小学校，Ⅴ期は国民学校）を対象とする。具体的には各期各巻各課ごとに，その内容を中心として以下のような分析作業を行なう。

(1)生命尊重についての評定；ここでいう生命尊重は人間尊重とほぼ同義で，人間の尊厳という信念に基づいて自他の人格・生命をともに尊重するという精神が内容的にどの程度もりこまれているかによって次の5段階に評定する。

L＋2；生命尊重の精神が特に顕著に認められる。
L＋1；生命尊重の精神が認められる。
L　0；いずれともいえない。関係ない。

L−1；生命尊重に反する内容が認められる。
L−2；生命尊重に反する内容が特に顕著に認められる。

(2)達成動機についての評定；その課の内容あるいは記述に，達成動機的なものがどの程度含まれているかを次の3段階に評定する。ここでいう達成動機（Achievement Motive）とは，McClelland, D. C. らのいわゆる「困難なことをうまくなし遂げたい，競争場面で人よりすぐれたいというような何らかの価値的目標に対して，自己の力を発揮し，障害に打ち克ち，できるだけよく目標を達成しようとする動機」[5]をさす。

A+2；達成動機が特に顕著に認められる。
A+1；達成動機が認められる。
A 0；達成動機とは特に関係ない。

(3)内容による分類；各期ごとの比較や他の教科あるいは他の研究との比較が可能なように唐沢の分類を参考にして次の10カテゴリーを設定し分類する。

表1

名　称	内　容
N(国家主義)	忠君愛国・国威発揚など国家主義的なもの
M(ミリタリズム)	軍事・戦争美化など軍国調のもの
E(教訓的内容)	道徳的教材・忠義・孝行など
S(季節・自然・年中行事)	自然の風物・地理・季節的行事など
I(生活・勤労・学校)	生活勤労・学校・政治・法律・経済など
P(遊び・スポーツ)	レクレーション・スポーツ・衛生も含む
H(歴史的内容)	歴史・伝記など
C(科学的内容)	物理・化学・生物など科学的内容のもの
T(文化的内容)	物語・劇・童話などの文学作品
U(分類不明)	上記のいずれにも含まれないもの

（註）分類に際しては重複を許し，特定の内容にむりに分類することを避ける。但しT（文学）は他の分類に含まれないものに限る。

(4)ジャンルによる分類；学習指導要領[6]などを参考に各課を次の8ジャンルに分類する。左の番号は以下の図表の番号に対応する。

1. 生活文，2. 詩・俳句・歌，3. 記録・報告・観察・説明文，4. 物語・昔話・説話・古典，5. 神話，6. 伝記・歴史・逸話，7. 手紙・日記，8. なぞなぞ・とんち話など。

なお分類にあたっては，いずれの領域においても原則として共同研究者同士で合意に達するまで検討する。

Ⅲ　結果および考察

ここでは，先に述べた主旨に基づき，国語教科書について分析した結果を中心に考察する。

1　国定教科書に至るまでの概観

欧米の近代文化を内容とした翻訳教科書時代の特色は，自然を尊重し自然に忠実であり，またその中で人間を最高の生き物として描いている点にある。それはまさに生命尊重人間尊重に立脚しているといえる。内容としては人間と自然の生の姿から，人と人との関係，人と自然との関係をとらえ，人と人との生き方を宗教的なものを含み説こうとしている。これは啓蒙的性格をその内容に備えていることであり，それをまち望んでいた民意に受け入れられた。しかし，当時の急務であった先進国文化摂取のため何もかもその中に含まれており，その意味では自由であったわけだが，体制側としてこれほど統一しにくいものはなかった。このことは，戦後すぐに新しい人間観による教科書作りをしなければならなかった国定Ⅵ期といろいろな点で共通しており興味深いものがある。

次の儒教主義復活時代になると「孝」を中心とする家族主義的内容の教科書が多くなり翻訳時代に後退していた修身が前面に出てくる。当時の自由民権運動を抑圧する意味もあり次の「忠君愛国」を基調とする検定教科書時代にひき継がれるのである。すなわち，検定時代には国家統制が一層強められることになる。野原，矢内は明治20年5月発行の「尋常小学読本」（文部省編纂）巻1～7を分析しているが，それによると総課数218のうち35%が道徳的内容であり，また，生命尊重が11%であるのに対し

て非生命尊重が23%を占めている[7]。そして，明治37年を境に国定教科書時代に入るのである。

2　国定教科書の分析

国定Ⅰ期からⅥ期までのすべての国語教科書について，課の内容を中心に，生命尊重（L）達成動機（A）という観点から分析し，さらに内容，ジャンルごとの検討を行なう。

(1)　全体的特徴

表2は生命尊重について各期学年ごとの頻度および比率を示したものである。なお比率を全学年と2～6年に分けたのは概ね1年生の教科書が単語の羅列であったり課としてのまとまりを欠くことが多かったからである[8]。同様に表3は非生命尊重について，表4は達成動機についてそれぞれ各期学年ごとの頻度および比率を示したものである。また図1は生命尊重（L+）非生命尊重(L−)，達成動機（A）をそれぞれ得点化し，各期ごとの特徴が比較対照できるようにしたものである。なお，得点の算出は次の方法による。生命尊重得点；L+1，L+2 をそれぞれ1，2点とし，その合計点を L+ 得点とする。非生命尊重得点；L−1，L−2 をそれぞれ1，2点とし，その合計点を L− 得点とする。達成動機得点；A+1，A+2 をそれぞれ1，2点とし，その合計点をA得点とする。

表2　各期学年別・生命尊重頻度

		1	2	3	4	5	6	計(2~6)	%	計(全)	%
Ⅰ	L+2	0	0	0	0			−	−	−	−
	L+1	1	0	2(4.7)	7(16.3)			9/128	7.0	10/166	6.0
	計	1/38	−	2/43	7/43			9/128	7.0	10/166	6.0
	%	2.6	−	4.7	16.3						
Ⅱ	L+2	0	0	0	0	0	0	−	−	−	−
	L+1	0	1(2.0)	1(2.0)	0	2(3.7)	2(3.6)	6/262	2.3	6/297	2.0
	計	−	1/50	1/50	−	2/54	2/56	6/262	2.3	6/297	2.0
	%	−	2.0	2.0	−	3.7	3.6				
Ⅲ	L+2	0	0	0	0	1(1.9)	0	1/263	0.4	1/298	0.3
	L+1	0	1(2.0)	0	2(3.7)	1(1.9)	1(1.8)	5/263	1.9	5/298	1.7
	計	−	1/50	−	2/54	2/52	1/55	6/263	2.3	6/298	2.0
	%	−	2.0	−	3.7	3.8	1.8				
Ⅳ	L+2	0	0	0	0	1(1.8)	0	1/257	0.4	1/311	0.3
	L+1	1(1.9)	1(2.2)	0	0	2(3.6)	3(5.5)	6/257	2.3	7/311	2.3
	計	1/54	1/45	−	−	3/55	3/55	7/257	2.7	8/311	2.6
	%	1.9	2.2	−	−	5.5	5.5				
Ⅴ	L+2	0	0	0	0	1(2.2)	0	1/294	0.3	1/397	0.3
	L+1	0	2(2.0)	0	1(2.1)	1(2.2)	4(8.0)	8/294	2.7	8/397	2.0
	計	−	2/102	−	1/48	2/46	4/50	9/294	3.1	9/397	2.3
	%	−	2.0	−	2.1	4.3	8.0				
Ⅵ	L+2	0	0	1(4.3)	1(3.7)	2(7.4)	2(5.9)	6/127	4.7	6/164	3.7
	L+1	0	1(3.0)	3(13.0)	1(3.7)	1(3.7)	1(2.9)	7/127	5.5	7/164	4.3
	計	−	1/26	4/23	2/27	3/27	3/34	13/127	10.2	13/164	7.9
	%	−	3.0	17.3	7.4	11.1	8.8				

表3　各期学年別・非生命尊重頻度

		1	2	3	4	5	6	(2~6)計	%	計(全)	%
Ⅰ	L−2	0	0	1(2.2)	2(4.7)			3/128	2.3	3/166	1.8
	L−1	1(2.6	2(5.0)	7(15.6)	3(7.0)			12/128	9.4	13/166	7.8
	計	1/38	2/40	8/45	5/43			15/128	11.7	16/166	9.6
	%	2.6	5.0	17.8	11.7						
Ⅱ	L−2	0	0	2(4.0)	6(11.5)	3(5.6)	4(7.1)	15/262	5.7	15/297	5.1
	L−1	2(5.7)	2(4.0)	1(2.0)	0	2(3.7)	4(7.1)	9/262	3.4	11/297	3.7
	計	2/35	2/50	3/50	6/52	5/54	8/56	24/262	9.3	26/297	8.8
	%	5.7	4.0	6.0	11.5	9.3	14.2				
Ⅲ	L−2	1(2.9)	0	3(5.8)	3(5.6)	3(5.8)	1(1.8)	10/263	3.8	11/298	3.7
	L−1	3(8.6)	1(2.0)	2(3.8)	2(3.7)	1(1.9)	1(1.8)	7/263	2.7	10/298	3.4
	計	4/35	1/50	5/52	5/54	4/52	2/55	17/263	6.5	21/298	7.0
	%	11.4	2.0	9.6	9.3	7.7	3.6				
Ⅳ	L−2	0	2(4.4)	3(6.0)	2(3.8)	3(5.5)	4(7.3)	14/257	5.4	14/311	4.5
	L−1	1(1.9)	0	5(10.0)	7(13.5)	6(10.9)	1(1.8)	19/257	7.4	20/311	6.4
	計	1/54	2/45	8/50	9/52	9/55	5/55	33/257	12.9	34/311	10.9
	%	1.9	4.4	16.0	17.3	16.4	9.1				
Ⅴ	L−2	0	0	3(6.3)	4(8.3)	10(21.7)	6(12.0)	23/294	7.8	23/397	5.8
	L−1	3(2.9)	1(1.0)	3(6.3)	3(6.3)	9(19.6)	5(10.0)	21/294	7.1	24/397	6.0
	計	3/103	1/102	6/48	7/48	19/46	11/50	44/294	15.0	47/397	11.8
	%	2.9	1.0	12.5	14.6	41.3	22.0				
Ⅵ	L−2	0	0	0	0	0	0	/		/	
	L−1	0	0	0	0	0	1(2.9)	1/127	0.8	1/164	0.6
	計	−	−	−	−	−	1/34	1/127	0.8	1/164	0.6
	%	−	−	−	−	−	2.9				

さてこれらの図・表をもとに生命尊重・達成動機についての全体的な特徴を概観してみよう。まず生命尊重の得点ではⅥ期を最高として，以下ⅠⅣⅢⅡ期とつづく。ここでは特にⅥ期の戦後が特徴的である。非生命尊重では，Ⅴ期が断然1位となり，以下ⅣⅡⅢⅠⅥ期となっている。Ⅲ期の大正デモクラシーの平和主義，民主主義時代を除いてⅤ期の太平洋戦争期に向って上昇している。また頂点のⅤ期からほとんど0に近いⅥ期の急降下は劇的ですらある。次に達成動機ではやはりⅤ期を頂点として順次上昇している。またⅥ期ではやはり下降しているのが特徴的である（図1）。このへんの事情をさらに明確化しようとしたものが図2である。すなわち図2は図1と同じく L^+・L^-・A をそれぞれ得点化し，それをさらに各期の課

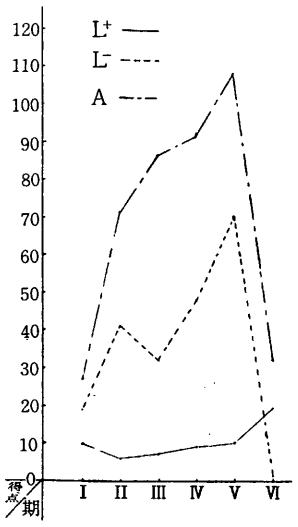


図1　各期別A・L得点

表4　各期学年別・達成動機頻度

		1	2	3	4	5	6	計(2-6)	%	計(全)	%
I	A+2	0	0	2(4.4)	4(9.3)			6/128	4.7	6/166	3.6
	A+1	2(5.3)	2(5.0)	8(17.8)	3(7.0)			13/128	10.2	15/166	9.0
	計	2/38	2/40	10/45	7/43			19/128	14.8	21/166	12.7
	%	5.3	5.0	22.2	16.3						
II	A+2	0	1(2.0)	3(6.0)	6(11.5)	6(11.1)	11(19.6)	27/262	10.3	27/297	9.1
	A+1	0	5(10.0)	4(8.0)	4(7.7)	1(1.9)	3(5.4)	17/262	6.5	17/297	5.7
	計	−	6/50	7/50	10/52	7/54	14/56	44/262	16.8	44/297	14.8
	%	−	12.0	14.0	19.2	13.0	25.0				
III	A+2	0	3(6.0)	5(9.6)	8(14.8)	9(17.3)	13(23.6)	38/263	14.5	38/298	12.8
	A+1	1(2.9)	1(2.0)	2(3.8)	5(9.3)	1(1.9)	4(7.3)	13/263	4.9	14/298	4.7
	計	1/35	4/50	7/52	13/54	10/52	17/55	51/263	19.4	52/298	17.5
	%	2.9	8.0	13.5	24.1	19.2	30.9				
IV	A+2	1(1.9)	3(6.7)	6(12.0)	11(21.1)	9(16.4)	9(16.4)	38/257	14.8	39/311	12.5
	A+1	2(3.7)	0	2(4.0)	5(9.6)	3(5.5)	1(1.8)	11/257	4.3	13/311	4.2
	計	3/54	3/45	8/50	16/52	12/55	10/55	49/257	19.1	52/311	16.7
	%	5.6	6.7	16.0	30.8	21.8	18.2				
V	A+2	1(1.0)	3(2.9)	7(14.6)	7(14.6)	17(37.8)	12(24.0)	46/294	15.6	47/397	11.8
	A+1	0	1(1.0)	0	6(12.5)	5(10.9)	2(4.0)	14/294	4.8	14/397	3.5
	計	1/103	4/102	7/48	13/48	22/46	14/50	60/294	20.4	61/397	15.4
	%	1.0	4.0	14.6	27.1	47.8	28.0				
VI	A+2	0	0	0	1(3.7)	5(18.5)	8(33.5)	14/127	11.0	14/164	8.5
	A+1	1(3.7)	0	0	1(3.7)	2(7.4)	0	3/127	2.4	4/164	2.4
	計	1/27	−	−	2/27	7/27	8/34	17/127	13.4	18/164	11.0
	%	3.7	−	−	7.4	25.9	33.5				

表5　各期別得点比 $\left(\frac{\text{得点}}{\text{課数}}\times 100\right)$

	I	II	III	IV	V	VI	計
L+	6.1	2.0	2.4	2.9	2.5	12.3	3.8
L−	11.4	13.9	10.8	15.5	17.6	0.6	13.0
A	16.2	24.1	29.1	29.4	27.2	20.8	25.6

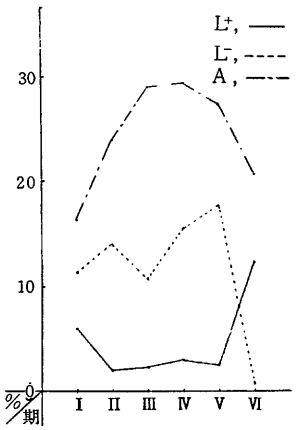


図2　各期別・A・L頻度

数で割り100を掛けたものである。ウエイトを加えた各期の得点比から，より各期の特徴を示そうとしたものである。なお，表5にその数値を示しておく。図2をみてわかることは，L^+ L^-はほぼ図1と同じプロフィールを描いているが，AはI期からIII期まで上昇し，以後高原状態となり，VI期においてかなりの落ち込みがみられる。以上が図1図2からみたI期からVI期までの全体的流れであるがいずれも時代社会の価値観を如実に反映しているように思われる。

次にそれを各期別に細かくみてみよう。

(2)　各期ごとの特徴

1)　I期は，教科書の性格として近代倫理重視の啓蒙的性格を備えている[9]。L^+得点では2位を示し，L^-得点では5位となっている（図1）。頻度からみても，L^+は2位，学年では4年で高くなっている。L^-は3位であり3年に高くつづいて4年となっている。Aでは5位となりやはり3年に高い数値を示している(表2・3・4)。得点比をみても，L^+；2位，L^-；4位，A；6位となっている(図2・表5)。このことから生命尊重ではVI期を除くすべての期より高く，逆に非生命尊重ではVI期についで低いことがわかる。前者については統計的にも有意である（表6）。

表6　生命尊重 X^2 検定結果（2—6年)[10]

期	I	II	III	IV	V	VI
I		↓↓	↓↓	↓↓	↓	
II						↑↑↑
III						↑↑↑
IV						↑↑↑
V						↑↑↑
VI						

表7　非生命尊重 X^2 検定結果（2—6年)[10]

期	I	II	III	IV	V	VI
I			↓			↓↓↓
II					↑↑	↓↓↓
III				↑↑	↑↑↑	↓↓
IV						↓↓↓
V						↓↓↓
VI						

つまりI期は生命尊重が比較的重視された時期であるといえる。また，達成動機が低いのは近代倫理による啓蒙が，まだこうした形では表面化していなかったことを示唆している。

次に内容面に注目すると，S（自然）・I（生活）・E（教訓）の順となっている。Sが高いのは，この時代の理科教科書の出遅れも影響し，自然，地理などを国語にとり入れたところに起因している。また，これは各期を通じていえることだが子どもを身近な生活領域に近づかせ，近代人としての視野の広さを養おうとする意図も予想される。次に低いところでは，M（ミリタリズム）・H（歴史）・N（国家主義）があげられる（表8）。まだ近代化への道を歩みはじめた段階であり，近代倫理を啓蒙する上でミリタリズム，ナショナリズム，ひいては国史的なものの影響は薄かったということができる。このことがL^+を高く，L^-を低くした原因でもある。

2)　II期は，家族国家主義的色彩が強い時期である[11]。L^+得点では最低値，L^-得点では

3位，A得点では4位を示す（図1）。頻度では L^+；5位，L^-；4位，A；4位となる。L^+では5，6年が高く，L^-では4，5，6年の順となり，Aは6，4，3年の順に高くなっている（表2・3・4）。ここではさほど目立った特徴はみられないが，L^+の下降，L^-の上昇，Aの上昇（図2・表5）はその後の方向を示唆するものとして興味深い。

内容では，Sは相変らず高い数値を示しているが，Nの数値が全期中3位に上昇している。また，Eは3位であり（表8），ジャンルの3（記録・説明）が高いことと考えあわせ，国家主義に傾斜しはじめた時期とみることができる（表9）。また，5（神話）ではⅤⅣ期につづき3位となり国家主義への姿勢を読みとることができる。しかしⅠ期の近代的精神がひきつがれ，C（科学）が高くなっている。

3) Ⅲ期は，大正デモクラシーの児童中心の教育思想を表現し，平和主義，民主主義が叫ばれた時期である。L^+得点では3位，L^-得点では4位，A得点では3位（図1・2）また頻度では L^+；5位，L^-；5位，A；1位となっている。但し2～6年でAは2位となる（表2・3・4）。L^+は4年から5年までが高く，Aは6，4，5，3年の順で高くなっている。得点比でも，Aは最高値であり，L^-が下降していることがわかる（図2・表5）。これから，Ⅲ期は個人を尊重し，平和主義を進めていこうとする姿勢をよみとることができる。

内容では，Iが1位であり，生活を中心にして児童に接していこうとする傾向がうかがわれる（表8）。ジャンルをみた場合も全期中3位で1が高くなっている。しかし内容のHをみた場合，全期中2位となっており，たんに平和主義，民主主義中心であるというより，同時にやがてくるファシズム時代の足音も敏感にキャッチしていたことが予想される（表9）。

4) Ⅳ期は，ファシズム強化の時期といわれ国民の形成は臣民の育成へとすすみ，国家はいよいよ臨戦体制に入っていく。L^+得点；4位，L^-得点；2位，A得点；2位となっている（図1）。また，頻度をみると，L^+；3位（但し2～6年だと4位），L^-；2位，A；2位（但し2～6年だと3位）となっている。L^-は5，3，4年の順で高く，Aは4，5，6，3年の順に高くなっている（表2・3・4）。

内容をみるとNが全期中2位，Mも2位，Hが3位となり，国家主義，戦争肯定の姿勢が強くなってきていることを示唆している（表8）。また，ジャンルをみると5が全期中2位となり，6（歴史）が1位となっている。これは次のⅤ期同様戦記物が増えてきたことを示している（表9）。

5) Ⅴ期は，太平洋戦争突入期である。この期の教科書は最も心理学的な配慮の行き届いた教科書であると同時に戦争協力的な色彩を最も強く帯びているのが大きな特徴である。ちなみに L^-得点は断然トップで，またA得点も1位，L^+得点は3位となっている（図1）。

頻度でもL^-；1位，A；3位（但し2～6年では1位），L^+；4位となっている。L^-は5，6，4，3年と高く，Aも5，6，4，3年と高くなっている（表2・3・4）。得点比でもL^-；1位，A；3位，L^+；4位となる（図2・表5）。なお統計的にもⅡⅢ期との間ではいずれも有意差が認められる（表6）。

内容面に注目すると，N・M・Hが全期中1位となり，Ⅴ期の八紘一宇の旗印のもと，国民が一丸となって国家を守るという，戦争の肯定皇国意識の高まりをみることができる（表8）。また，ジャンルでは1が全期中2位であるがこの生活文は子どもを身近な生活領域へ近づかせるため，各期ともに高くなっている。またⅤ期の1，2年の特徴として，生活文が高くなっている。ちなみに2年次は46.7%でⅢⅥ期をしのいでいる。その他では6，5，4（物語）をあげることができる。特に6，4は戦記物がかなり多く含まれており，5は数値的には低いものの全期中1位である（表9）。いずれも国家主義的色彩，あるいは戦争への協力的性格のもの

が高くなり，前述のL⁻が最も高く，Aもかなり高い数値を示していることとあわせ考えるとV期の全体的性格として，国家をあげての皇国意識，聖戦という美意識を作りあげていたことが明らかとなる。

表8　各期内容別頻度

内容 期・学年		N	M	E	S	I	P	H	C	T
I期	2	5(12.5)	1(2.5)	11(29.5)	26(65.0)	8(20.0)	6(15.0)	3(7.5)	4(10.0)	
	3	3(5.7)	8(17.8)	7(15.6)	29(64.4)	14(31.1)	1(2.2)	8(17.8)	12(26.7)	
	4	10(23.3)	5(11.6)	14(32.6)	16(35.6)	15(34.9)	3(7.0)	4(9.3)	8(18.6)	
	計	18/128	14/128	32/128	71/128	37/128	10/128	15/128	24/128	
	%	14.1	10.9	25.0	55.5	28.9	7.8	11.7	18.8	
II期	2	3(6.0)	0	11(22.0)	26(52.0)	12(24.0)	3(6.0)	3(6.0)	7(14.0)	2·4.C.
	3	4(8.0)	4(8.0)	15(30.0)	21(42.0)	14(28.0)	1(2.0)	5(10.0)	14(28.0	1.2.0
	4	10(19.2)	4(7.7)	11(21.4)	14(26.9)	15(28.8)	1(1.9)	7(13.5)	10(19.2)	2(3.8)
	5	12(22.2)	5(9.3)	7(13.5)	19(35.2)	13(24.1)	3(5.6)	8(14.8)	5(9.3)	1(1.9)
	6	12(21.4)	12(21.4)	11(19.6)	18(32.8)	17(31.5)	2(3.6)	10(17.9)	3(5.4)	2(3.6)
	計	41/262	25/262	55/262	98/262	71/262	10/262	33/262	39/262	8/262
	%	15.6	9.5	21.0	37.4	27.1	3.8	12.6	14.9	3.1
III期	2	1(2.0)	1(2.0)	5(10.0)	21(42.0)	19(38.0)	4(8.0)	3(6.0)	4(10.0)	1(4.0)
	3	6(11.5)	7(13.5)	7(13.5)	20(38.5)	20(18.5)	4(7.7)	6(11.5)	9(17.3)	1(1.9)
	4	5(9.3)	5(9.3)	14(25.9)	15(27.8)	18(33.3)	2(3.7)	10(18.5)	8(14.8)	3(5.6)
	5	8(15.4)	8(15.4)	5(9.3)	21(40.4)	30(59.7)	0	8(15.4	2(3.8	0
	6	3(5.5)	3(5.5)	12(21.8)	18(32.7)	15(27.3)	1(1.8)	13(23.6)	6(10.9)	4(5.5)
	計	23/253	24/253	31/253	95/253	102/253	11/253	40/253	29/253	9/253
	%	8.7	9.1	16.3	36.1	38.8	4.2	15.2	11.0	3.4
IV期	2	1(2.2)	3(6.7)	4(8.9)	19(42.2)	13(28.9)	10(22.2)	0	2(4.4)	5·11.1
	3	12(24.0)	5(10.0)	5(10.0)	25(52.0)	15(30.0)	4(8.0)	6(12.0	5·10.0	2(4.0)
	4	7(13.5)	8(15.4)	7(13.5)	23(44.2)	12(23.1)	2(3.8)	12(23.1)	3(5.8)	2(3.8)
	5	9(16.4)	17(31.0)	15(27.3)	30(54.5)	7(12.7)	1(1.8)	9(16.4)	3(5.5)	0
	6	11(20.0)	6(10.9)	8(14.5)	26(47.3)	7(12.7)	1(1.8)	12(21.8)	6(10.9)	1(1.8)
	計	40/257	39/257	39/257	124/257	54/257	18/257	39/257	19/257	10/257
	%	15.6	15.2	15.2	48.2	21.0	7.0	15.2	7.4	3.9
V期	2	20(19.5)	22(21.6)	8(7.8)	45(44.1)	39(38.2)	21(20.6)	0	5(4.9)	9(8.8.
	3	14(29.2)	13(27.1)	7(14.6)	22(45.8)	16(33.3)	5(10.4)	5(10.4)	6(12.5)	2(4.2)
	4	12(25.0)	13(27.1)	3(6.3)	19(39.6)	7(14.6)	2(4.2)	13(27.1)	11(22.9)	0
	5	13(22.3)	19(41.3)	9(19.6)	14(30.4)	14(30.4)	2(4.3)	18(39.1)	9(19.6)	0
	6	15(30.0)	16(32.0)	10(20.0)	16(32.0)	4(8.0)	3(6.0)	13(26.0)	3(6.0)	1(2.0)
	計	74/294	83/294	37/294	116/294	80/294	33/294	49/294	34/294	12/294
	%	25.2	28.2	12.6	39.5	27.2	11.2	16.7	11.6	4.1
VI期	2			6(23.0)	14(53.8)	18(69.2)	2(9.0)	0	0	3(11.0)
	3			8(34.8)	13(56.5)	14(60.9)	3(13.0)	0	2(8.7)	1(4.3)
	4			4(14.8)	14(51.9)	12(44.4)	2(7.4)	0	2(7.4)	6(22.2)
	5			12(44.4)	6(22.2)	15(55.6)	5(11.1)	6(22.2)	0	2(7.4)
	6			19(79.2)	10(41.7)	16(66.7)	7(4.7)	0	3(12.5)	1(4.7)
	計			49/127	57/127	75/127	19/127	6/127	7/127	13/127
	%			38.6	55.9	59.0	15.0	4.7	5.5	10.2

( )=%

内容をみると，N・Mが0である。生命尊重が高まれば当然の結果としてN・Mは消えていく。Iは戦後の新しい生活を早く根づかせるため，かなり高い数値を示している。それと同じことがSにも言える。Eが高いのはやはり新しい倫理観の根づきを期待してのことと思われる（表8）。

ジャンルをみると，1が全期中1位であり，その意味は前に述べた通りである。4が高いのは物語により人間のあたたかさ，やさしさ，人間の尊厳といったものを訴えかけようとしたものでIV期にみられた戦記物が全く違った装いで登場してきたとみることができよう。また長文の物語が多いのもVI期の特徴である。より生活に密着した形でじっくりとりくませようという意図を感じさせる

表9　各期ジャンル別頻度

ジャンル 期・学年		1	2	3	4	5	6	7	8
I期	2	8(20.0)	5(12.5)	20(50.0)	8(20.0)		1(2.5)		
	3	5(11.1)	6(13.3)	22(48.9)	8(17.8)		5(11.1)		
	4	2(4.7)	6(14.0)	28(65.1)	5(11.6)		3(7.0)	5(11.6)	
	計	15/128	17/128	70/128	21/128		9/128	5/128	
	%	11.7	13.3	54.7	16.4		7.0	3.9	
II期	2	9(18.0)	6(12.0)	20(40.0)	5(10.0)	3(6.0)	3(6.0)		3(6.0)
	3	6(12.0)	5(10.0)	18(36.0)	10(20.0)	1(2.0)	6(12.0)	3(6.0)	1(2.0)
	4	4(7.7)	6(11.5)	22(42.3)	6(11.5)		9(17.3)	5(9.6)	
	5		5(9.3)	31(57.4)	3(5.6)	2(3.7)	7(13.5)	6(11.1)	
	6		6(10.7)	37(66.1)	2(3.6)		8(14.3)	3(5.4)	
	計	19/262	28/262	128/262	26/262	6/262	33/262	17/262	4/262
	%	7.3	10.7	48.9	9.9	2.3	12.6	6.5	1.5
III期	2	22(44.0)	6(12.0)	8(16.0)	6(12.0)	1(2.0)	3(6.0)	1(2.0)	3(6.0)
	3	13(25.0)	7(13.5)	16(30.8)	5(9.6)	2(3.8)	6(11.5)	5(9.6)	2(3.8)
	4	6(11.1)	6(11.1)	23(42.6)	6(11.1)		13(24.1)	8(14.8)	
	5	11(21.2)	6(11.5)	19(36.5)	1(1.9)	1(1.9)	8(15.4)	6(11.5)	
	6	5(9.1)	7(12.7)	21(38.2)	5(9.1)		12(21.8)	4(7.3	1(1.8)
	計	57/253	32/253	87/253	23/253	4/253	42/253	24/253	6/253
	%	21.7	12.2	33.1	8.7	1.5	16.0	9.1	2.3
IV期	2	15(33.3)	13(28.9)		12(26.7)	2(4.4)		1(2.2)	2(4.4)
	3	15(30.0)	11(22.0)	5(10.0)	4(8.0)	6(12.0)	5(10.0)	2(4.0)	1(2.0)
	4	7(13.5)	13(25.0)	9(17.3)	6(11.5)	1(1.9)	13(25.0)	3(5.8)	
	5	10(18.2)	11(20.0)	14(25.5)	4(7.3)		18(32.7)	1(1.8)	
	6	5(9.1)	11(20.0)	21(38.2)	5(9.1)		12(21.8)	1(1.8)	1(1.8)
	計	52/257	59/257	49/257	31/257	9/257	48/257	8/257	4/257
	%	20.2	23.0	19.1	12.1	3.5	18.7	3.1	1.6
V期	2	47(46.1)	25(24.5)	7(6.9)	23(22.5)	4(3.9)	1(1.0)	1(1.0)	
	3	15(31.3)	11(22.9)	4(8.3)	1(2.1)	6(12.5)	6(12.5)	5(10.4)	
	4	8(16.7)	12(25.0)	10(20.8)	2(4.2)	1(2.1)	13(27.1)	2(4.2)	
	5	10(21.7)	8(17.4)	15(32.6)	7(15.2)	1(2.2)	17(37.0)	1(2.2)	
	6	4(8.0)	11(22.0)	14(28.0)	8(16.0)		16(32.0)	1(2.0)	
	計	84/294	67/294	50/294	41/294	12/294	53/294	10/294	
	%	28.6	22.8	17.0	13.9	4.1	18.0	3.4	
VI期	2	12(46.0)	3(11.0)	1(3.0)	9(34.0)			1(3.0)	
	3	11(47.8)	8(34.8)	1(4.3)	8(34.8)		1(4.3)	2(8.7)	
	4	6(22.2)	2(7.4)	9(33.3)	10(37.0)			2(7.4)	
	5	9(33.3)	6(22.2)	4(14.8)	4(14.8)		6(22.2)		
	6	5(20.8)	3(12.5)	8(33.3)	6(25.0)		1(4.7)	1(4.7)	
	計	43/127	22/127	23/127	37/127		6/127	6/127	
	%	33.9	17.3	18.1	29.1		6.3	4.7	

( )=%

6）Ⅵ期は一変する。I～V期までと全く趣きを異にし，新しい人間観，世界観に立脚しなければならないという意図がみられる。すなわち世界中の子どもたちと仲よく手をつなぐということから，自分たちの生きる新しい世界が創りあげられるという意識がその中に盛り込まれている。L^+得点は1位，L^-得点は6位，A得点は3位となっている（図1）。また頻度では，L^+；1位，L^-；6位，A；6位となっている。L^+は3，6，5，4年の順に高く，Aは6，5，4年と高い（表2・3・4）。得点比ではL^+；1位，L^-；6位，A；5位を示している（図2・表5）。いずれも統計的には0.5%水準で有意である（表6）。図2のプロフィールをみればわかるように，L^-の急激な落ち込みは劇的である。また，それと反比例するようにL^+の急上昇がみられる。

つまりこの図はⅥ期の教科書の性格のすべてを反映し，生命尊重，人間尊重の新しい観点に立脚しようとした意図が如実に示されている。達成動機が低いことは，人間的やさしさであるとか，仲よくするなど親和的な面が強調されそれが必然的に従来の，人を押しのけてまでという達成への執着を後退させていったものと思われる。

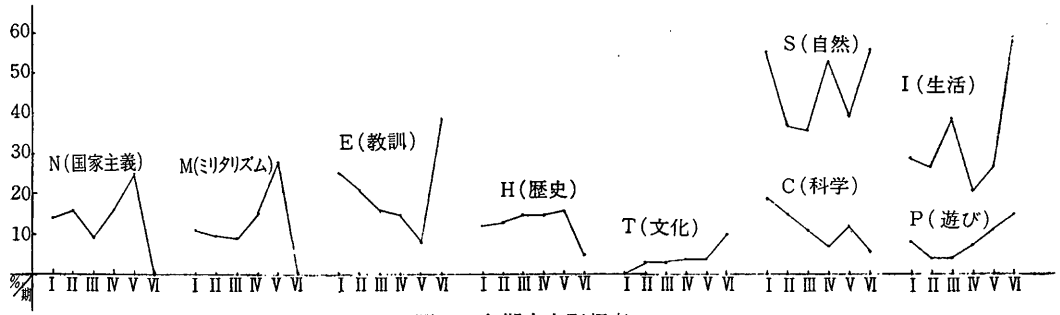


図3　各期内容別頻度

(表9)。

7) 生命尊重，非生命尊重，達成動機を全体的にみた場合，各期とも概ね3，4，5年に集中しているようにみうけられる。また内容では各期ともに自然が高く，ついで生活が高くなっている。内容の重複をよしとした分析方法をとった結果，重複しやすい項目であったことも一因であろうが明治から昭和に至る国語教育の特徴として貴重な示唆を与えてくれる。

McClelland, D. C. は次のように述べている。「達成を強調する国語教科書は，国民が公に達成について考える傾向，つまり国民の抱負といったようなものを示している。[12]」昭和16年のV期教科書が示すように，国民が一丸となった戦争への姿勢が，非生命尊重という人間観を創りだし，戦いを聖戦にまで高めた達成の強さをそこにみることができる。すなわち，今回とりあげた明治37年から昭和21年に至る国語教科書はその時代の推移とともに，各々の時代社会のもつ価値観，文化，伝統といったものを明確に反映しているように思われる。

Ⅳ　今後の課題

以上のように本研究では国定Ⅰ期からⅥ期までの全国語教科書を生命尊重・達成動機という観点から内容分析し，その結果について考察してきた[13]。そして，当初予期した以上に時代社会のもつ価値観を敏感に先取りし，それが内容を大きく支配していることが確認された。しかしはじめての試みでもあり手続き方法等に関しいろいろ問題のあることも予想される。またこの教科書が実際に子どもに如何なる影響を及ぼし将来の行動や生き方をどう規定していったかについて可能な範囲で実証的にとらえていく必要がある。これらは今後に残された大きな課題といえよう。そして，その成果をもとに冒頭に述べた生命尊重，人間尊重という教育本来の目的を実現するための教材，ひいては教育とは一体何かを問いかけていきたい。

本研究を行なうにあたっては，次の諸氏をはじめ多くの方々の御指導御援助をいただいた。

付記して厚く御礼を申し上げる次第である。

堀内康人先生，跡見一子先生，落合聡三郎先生，鈴木敬司先生，千葉胤嗣先生，木暮俊夫先生，菊地文男先生，高田真弓氏，矢内弘子氏，野原幸子氏，秋葉信子氏，森沢優子氏ほか。

(注)

1) 唐沢富太郎「教科書の歴史」創文社，1956
2) 文部省「学制百年史」資料編，ぎょうせい，1972
3) 唐沢富太郎「前掲書」
4) 海後宗臣・仲新「近代日本教科書総説」解説編，講談社，1969
5) McClelland, D. C., Atokinson, J. W., Clark, R. A. & Lawell, E. L., The Achivement Motive. N. Y., Appleton Century, 1953, なお McClelland は，国語教科書や文学作品などを，達成動機という観点から分析して，国の盛衰と結びつけたり，興味ある研究を行なっている。

McClelland, D. C., The Achiving Society. Van Nostrand Company, INC, 1961 (林保監訳「達成動機」産業能率短期大学出版部，1971)

林保他「達成動機の理論と実際」誠信書房，1967にも紹介されている。

6) 昭和43年版

7) 野原幸子・矢内弘子「生命尊重と教育に関する一考察—国語教科書の分析を通して」昭和51年度東京家政大学卒業論文，p. 105

8) 1年生では，単語の羅列で課としての体をなしていない場合，原則として内容中心に独自の判断で課を設定した。

また，V期とVI期は他と比べ特徴ある編集をしているため，次のような方法で課数を決めた。V期では，6年のそれぞれの巻末に附録がつけられているが，それも本文と同じように扱う。

9) 唐沢富太郎「前掲書」p. 253—p.257

10) ↑，↑↑，↑↑↑，はそれぞれ10%以下，5%以下，1%以下で有意であることを示す。また，矢印が上向きの場合は，上段>下段，下向きの場合は下段>上段の方向に有意であることを示す。

11) 唐沢富太郎「前掲書」，p.298—p. 307

12) McClelland, D. C.「前掲書」p. 120

13) 本論文の一部は，第19回日本教育心理学会において報告した。